

2019 年度FD活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会
委員長（学長） 荒井 真
副委員長（教務部長） 竹内 正彦

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでも、さまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきました。

2019 年度は、「産業界のニーズ」に関する学びのために、学外講師を招いて講演会を行いました。

また、本学の強みである語学教育の更なる発展を狙いとして、学内で 2015 年度から実施している「外国語による教授法プロジェクト」を開催しました。今回は音楽学部専門科目における「外国語による授業展開」の実例について授業運営する本学教員の報告と、その授業の履修学生を交えたトークセッションを中心に進行し、授業の実践方法やそれに対する学生の生の声を聞く機会を持ちました。

その他、例年どおり授業アンケートや学修行動調査を実施し、学生の実態を把握するための情報収集に努めた一方、研究倫理教育やコースワークとリサーチワークを明記したマップを作成するなど、新たな試みとして大学院の FD 活動にも注力しました。

目次

1. 大学 FD ワークショップ報告	1
外国語による教授法プロジェクト⑤	
「外国語による音楽実践教育の効果について考える ～履修者の声をもとにした検証と今後～」	
2. 大学 FD 講演会報告	
第 1 回「産業界のニーズ」を踏まえた本学の今後の教育の在り方を考える ～フェリスの強みや特色をどのように活かすか～	6
3. 学修行動調査	11
4. 教育の質向上に向けた取り組み	
授業アンケートと授業改善計画	12
ルーブリックの活用	12
卒業生調査	13
PBL 科目の推進	14
大学院の FD 活動	15
5. 2019 年度活動内容	16

第1回FDワークショップ 外国語による教授法プロジェクト⑤

外国語による音楽実践教育の効果について考える
～履修者の声をもとにした検証と今後～

日時：2019年7月10日（水） 18:00～19:00
 会場：緑園キャンパス CLA棟 3階 2303教室
 題目：外国語による音楽実践教育の効果について考える
 ～履修者の声をもとにした検証と今後～

プログラム

18:00～18:10 開会
 18:10～18:35 第1部：事例報告
 18:35～19:00 第2部：トークセッション（質疑応答）
 19:00 閉会

ファシリテーター：竹内 正彦 教務部長（文学部日本語日本文学学科教授）

報告者：立神 粧子 教授（音楽学部音楽芸術学科教授）

パネリスト：16BD026 谷河 礼菜（音楽芸術学科4年）
 17BD020 鈴木 万結（音楽芸術学科3年）

対象者：本学教職員、学生

出席者：専任・嘱託教員 11名
 （英文2、日文3、コミュ0、国際2、音芸4）
 非常勤講師 1名（音芸1）
 学生 1名、職員 13名

ワークショップチラシ

主催：FD（外国語による教授法）プロジェクト
 外国語による教授法プロジェクト

外国語による音楽実践教育の効果について考える
 ～履修者の声をもとにした検証と今後～

◆日時：2019年7月10日（水） 18:00～19:00
 ◆会場：CLA棟3階 2303教室
 ◆対象者：本学教職員・学生

今回のFDワークショップは、学生参加型です！

○タイムテーブル○
 18:00～18:10 開会
 18:10～18:35 事例報告
 18:35～19:00 トークセッション

報告者：立神 粧子 教授 音楽学部音楽芸術学科教授
 第3回外国語による教授法プロジェクト（FD）ワークショップを促して、今年度から外国語による音楽実践教育の履修者から、授業の感想、履修の意義、履修の困難さなどについて、検証していきます。

パネリスト：立神 粧子 教授、「共演芸術A」の履修学生
 履修生による授業の感想、履修の意義、履修の困難さなどについて、検証していきます。

19:00 閉会

司会・コーディネーター：竹内 正彦 教務部長

＜詳細情報＞
 本学は音楽学部、文学部、経済学部の3学部からなる総合大学です。2019年度より、第1回「2019年度FD（外国語による教授法）プロジェクト」を開催し、第1回FDワークショップを開催しました。第2回FDワークショップは、2019年7月10日（水）に開催されます。第3回FDワークショップは、2019年7月20日（土）に開催されます。第4回FDワークショップは、2019年7月27日（土）に開催されます。第5回FDワークショップは、2019年8月3日（土）に開催されます。第6回FDワークショップは、2019年8月10日（土）に開催されます。第7回FDワークショップは、2019年8月17日（土）に開催されます。第8回FDワークショップは、2019年8月24日（土）に開催されます。第9回FDワークショップは、2019年8月31日（土）に開催されます。第10回FDワークショップは、2019年9月7日（土）に開催されます。第11回FDワークショップは、2019年9月14日（土）に開催されます。第12回FDワークショップは、2019年9月21日（土）に開催されます。第13回FDワークショップは、2019年9月28日（土）に開催されます。第14回FDワークショップは、2019年10月5日（土）に開催されます。第15回FDワークショップは、2019年10月12日（土）に開催されます。第16回FDワークショップは、2019年10月19日（土）に開催されます。第17回FDワークショップは、2019年10月26日（土）に開催されます。第18回FDワークショップは、2019年11月2日（土）に開催されます。第19回FDワークショップは、2019年11月9日（土）に開催されます。第20回FDワークショップは、2019年11月16日（土）に開催されます。第21回FDワークショップは、2019年11月23日（土）に開催されます。第22回FDワークショップは、2019年11月30日（土）に開催されます。第23回FDワークショップは、2019年12月7日（土）に開催されます。第24回FDワークショップは、2019年12月14日（土）に開催されます。第25回FDワークショップは、2019年12月21日（土）に開催されます。第26回FDワークショップは、2019年12月28日（土）に開催されます。第27回FDワークショップは、2020年1月4日（土）に開催されます。第28回FDワークショップは、2020年1月11日（土）に開催されます。第29回FDワークショップは、2020年1月18日（土）に開催されます。第30回FDワークショップは、2020年1月25日（土）に開催されます。第31回FDワークショップは、2020年2月1日（土）に開催されます。第32回FDワークショップは、2020年2月8日（土）に開催されます。第33回FDワークショップは、2020年2月15日（土）に開催されます。第34回FDワークショップは、2020年2月22日（土）に開催されます。第35回FDワークショップは、2020年2月29日（土）に開催されます。第36回FDワークショップは、2020年3月6日（土）に開催されます。第37回FDワークショップは、2020年3月13日（土）に開催されます。第38回FDワークショップは、2020年3月20日（土）に開催されます。第39回FDワークショップは、2020年3月27日（土）に開催されます。第40回FDワークショップは、2020年4月3日（土）に開催されます。第41回FDワークショップは、2020年4月10日（土）に開催されます。第42回FDワークショップは、2020年4月17日（土）に開催されます。第43回FDワークショップは、2020年4月24日（土）に開催されます。第44回FDワークショップは、2020年5月1日（土）に開催されます。第45回FDワークショップは、2020年5月8日（土）に開催されます。第46回FDワークショップは、2020年5月15日（土）に開催されます。第47回FDワークショップは、2020年5月22日（土）に開催されます。第48回FDワークショップは、2020年5月29日（土）に開催されます。第49回FDワークショップは、2020年6月5日（土）に開催されます。第50回FDワークショップは、2020年6月12日（土）に開催されます。第51回FDワークショップは、2020年6月19日（土）に開催されます。第52回FDワークショップは、2020年6月26日（土）に開催されます。第53回FDワークショップは、2020年7月3日（土）に開催されます。第54回FDワークショップは、2020年7月10日（土）に開催されます。第55回FDワークショップは、2020年7月17日（土）に開催されます。第56回FDワークショップは、2020年7月24日（土）に開催されます。第57回FDワークショップは、2020年7月31日（土）に開催されます。第58回FDワークショップは、2020年8月7日（土）に開催されます。第59回FDワークショップは、2020年8月14日（土）に開催されます。第60回FDワークショップは、2020年8月21日（土）に開催されます。第61回FDワークショップは、2020年8月28日（土）に開催されます。第62回FDワークショップは、2020年9月4日（土）に開催されます。第63回FDワークショップは、2020年9月11日（土）に開催されます。第64回FDワークショップは、2020年9月18日（土）に開催されます。第65回FDワークショップは、2020年9月25日（土）に開催されます。第66回FDワークショップは、2020年10月2日（土）に開催されます。第67回FDワークショップは、2020年10月9日（土）に開催されます。第68回FDワークショップは、2020年10月16日（土）に開催されます。第69回FDワークショップは、2020年10月23日（土）に開催されます。第70回FDワークショップは、2020年10月30日（土）に開催されます。第71回FDワークショップは、2020年11月6日（土）に開催されます。第72回FDワークショップは、2020年11月13日（土）に開催されます。第73回FDワークショップは、2020年11月20日（土）に開催されます。第74回FDワークショップは、2020年11月27日（土）に開催されます。第75回FDワークショップは、2020年12月4日（土）に開催されます。第76回FDワークショップは、2020年12月11日（土）に開催されます。第77回FDワークショップは、2020年12月18日（土）に開催されます。第78回FDワークショップは、2020年12月25日（土）に開催されます。第79回FDワークショップは、2021年1月1日（土）に開催されます。第80回FDワークショップは、2021年1月8日（土）に開催されます。第81回FDワークショップは、2021年1月15日（土）に開催されます。第82回FDワークショップは、2021年1月22日（土）に開催されます。第83回FDワークショップは、2021年1月29日（土）に開催されます。第84回FDワークショップは、2021年2月5日（土）に開催されます。第85回FDワークショップは、2021年2月12日（土）に開催されます。第86回FDワークショップは、2021年2月19日（土）に開催されます。第87回FDワークショップは、2021年2月26日（土）に開催されます。第88回FDワークショップは、2021年3月5日（土）に開催されます。第89回FDワークショップは、2021年3月12日（土）に開催されます。第90回FDワークショップは、2021年3月19日（土）に開催されます。第91回FDワークショップは、2021年3月26日（土）に開催されます。第92回FDワークショップは、2021年4月2日（土）に開催されます。第93回FDワークショップは、2021年4月9日（土）に開催されます。第94回FDワークショップは、2021年4月16日（土）に開催されます。第95回FDワークショップは、2021年4月23日（土）に開催されます。第96回FDワークショップは、2021年4月30日（土）に開催されます。第97回FDワークショップは、2021年5月7日（土）に開催されます。第98回FDワークショップは、2021年5月14日（土）に開催されます。第99回FDワークショップは、2021年5月21日（土）に開催されます。第100回FDワークショップは、2021年5月28日（土）に開催されます。

事例報告

概要

報告者（立神教授）が担当する2019年度前期開講科目「共演芸術A」では、初めてアンサンブルを「英語で学ぶ」ことを実践している。構想、準備、そして実際の授業で得た数々の反応から今後への展望が報告された。

音楽学部で音楽を学ぶということの中心は、西洋音楽＝欧米を中心とした音楽の勉強であり、外国語が専門用語の中に多く含まれ、かつ何か国語もの専門用語を日常的に使う。そこで、授業の目標を「アンサンブルを英語で学ぶ」ことで「アンサンブルの技術」と「英語によるコミュニケーション力」の両方を実践的に高めることと捉え、いわゆる「語学」の勉強だけでなく、「英語で音楽」といった異なるジャンルの掛け合わせが、使える語学の勉強につながる。また、こういった勉強を続けることで、英語能力の向上に加え、音楽の実践においても、ブレインストーミングの効果で新鮮な観点から学びを深めることができることを理想としている。

一方で、英語による音楽教育の難しさも存在し、リスニングの技術やスピードと正確性が必要な「英語の理解」、音楽専門用語に加え、他言語の音楽用語をも必要とする「音楽の理解」、自主練にリハーサル、授業演奏、本番と人前で演奏するための事前準備でのコミュニケーションが必要となる「アンサンブルの実践」の3つを乗り越えていく必要がある。

そこで、「読む・実践する」、「聞く」、「話す・書く」という段階形式の手法を採った。当初、学生たちの表情は混乱している様子だったが、2/3を過ぎた第10週には顔つきが変わり、コメントシートに表れる理解度も上昇した。本科目のように少人数による特殊な授業では、学生たち一人ひとりの反応をくみ取ることが教師側としては非常に重要であり、毎回のコメントシートや、学生の表情、クラス全体の士気についても気を配る必要がある。また、Quizのようなミニテストによって、その都度学生の理解度を把握することで、授業計画そのものを戦略立てし、場合によってはシラバスを調整することもある。

その結果、学生のコメントに変化が現れてきた。英語に対する意欲のみならず、ブレインストーミングの効果として、アンサンブルや演奏した楽曲への的確なコメントなど能動的な学習効果が現れている。

こうした実践・結果を踏まえると、英語による音楽教育のメリットと英語による実践教育のメリットは次のとおりである。

【英語による音楽教育のメリット】

- (1) 端的でクリアな指摘→より重要なことに集中できる
- (2) 好きな音楽に応用することで「使える英語」に
- (3) 音楽を、日本語より具体的に考える力がつく
- (4) 英語が聞きとれるようになっている

【英語による実践教育のメリット】

- (1) 最も重要なことから学べる→演奏の質の向上
- (2) コミュニケーションのためのブレインストーミング
 - ・アンサンブルのコメントを英語で…positive comment の実践
 - ・アンサンブルをより良くするために全員で…日本語→英語で
- (3) 楽しくなると、練習への意欲が増す→良い演奏になる

最後に、今後の授業展開の展望と、立神教授が「英語による音楽教育を実践する」うえで大切にしていることを挙げる。

1) 学期末…曲の演奏+解説を英語で

学期末は「課題曲の演奏と曲の紹介を英語で」行うこととした。人前で端的に紹介できるようになることを目標として、学生が自身の課題曲の説明文を英語で書く。教員の添削後、スピーチできるように覚え、人前で端的に紹介できるようになることが目標とする。

2) 地道な練習の積み重ねが本番の成功を導く

演奏実技も英語の習得も日々の地道な練習が不可欠であり、その積み重ねとしっかりした準備が本番で力を発揮する能力を作る。

3) 柔軟な対応力…実技同様、固有+クラスの問題を解決

個人実技のレッスンの時と同様、個人に固有の問題を見つけ、早めに解決することで悪い癖を治し、良い習慣を身につけることが大切である。またクラス全体の雰囲気から、授業の進め方を柔軟に対応することで少人数の効果的な進め方につなげることができる。

4) 実践の重要性…応用+練習+実践

アンサンブルの演奏も英語も、①楽譜からの学び、②自分なりに応用、③修正、④練習、⑤実践、という流れの積み重ねが重要である。また、スパイラルのようにして積み重ねることで、アンサンブルにおける相手とのコミュニケーション力も実践により力がついていく。

5) 楽しむ気持ち…音楽・英語・相手 に対して

音楽であろうと英語であろうと、「苦手」や「きらい」と思いこまず、まずは「取り組む」「トライしてみる」ことが大切で、自分の枠から飛び出して「向こう側に行ってみる」チャレンジこそが大学の学びの醍醐味ではないか。

トークセッション

ファシリテーターの竹内教授および会場の出席者から、パネリスト（「共演芸術 A」履修学生 2 名）及び立神教授に対し、質問がなされ、次のとおり発表があった。（以下、敬称略）

(1) 「共演芸術 A」を履修した理由

谷河：英語で授業が行われることには少し躊躇したが、4 年次になるにあたり、たとえ苦手なことでも学生のうちに今までにしたことのないことに挑戦したいと思ったことに加え、音楽芸術学科の学生にもアンサンブルの機会があることが魅力的だった。

鈴木：もともと音楽が好きで、幼少時より英語学習歴もあるため、音楽と語学両方の力をアップしたいと思いフェリスに入学したので、好きな音楽も英語も学ぶことのできる科目があると知り、1 年

次の頃から履修したいと思っていた。

(2) 実際に英語による授業を履修した感想

鈴木：幼少時からの英語学習を積み重ねてきたので、授業内容は理解できることが多いが、専門用語を英語で学ぶのは難しかった。例えば、授業中に出てきた「メジャー」という単語について、自分が知っていた“major (専攻する)”では文脈にそぐわず、戸惑って調べてみると、“measure (小節)”という音楽の専門用語であったことなどがあった。

谷河：中高では受験英語が学習の中心で、日常会話での英語を耳にする機会が少なかったため、履修当初は「どうしよう、自分はこんなに聞き取れなかったんだ、話せなかったんだ」とショックを受けた。今となっては楽しいが、初めは英語に慣れておらず、「何とか聞いて、何とか反応しなきゃ」と、クラスに入ると肩に力が入る感じだった。現在では、自分が実践をする日も、他の人の実践を聞く日も、クラスメイトの頑張りをみることから刺激を受けるので、毎週の授業が楽しい。

(3) 英語の勉強は授業外でも行っていたか

谷河：授業で使用しているテキストの予習復習が必要であったことが、授業外学習の助けになった。授業内で「話す」「聞く」の機会があったおかげで、英語学習が楽しくなった。

(4) 履修者数について、また、英語による授業が苦しそうな学生は実際のところいるか

立神：履修者は15名。途中で授業をとらなくなった学生が1名いる。

(5) 授業において、英語で説明した後で日本語でも説明をすることがあるか

立神：念のための日本語、として、確認のための説明をすることがある。

(6) 使用しているテキストは、オールイングリッシュか

立神：英語と日本語が半々で対応している物を使用している。音楽用語など専門的な内容が多いので、今後もオールイングリッシュのテキストを用いる予定はない。日本語が横にあると学生は安心する。取り上げる部分についても調整して授業内容に取り入れている。

(7) 授業の感想について「楽しい」という答えがあったが、その要因は、英語が分かるようになったことか、それとも音楽が分かるようになったことか

谷河：できなかったことができるようになる、できたことがより深まる、そのどちらも「楽しい」といえるのではないか。自分はその両方の意味でこの授業が「楽しい」と感じている。

鈴木：自分にとって、この授業は“fun”と“interesting”両方の意味で「楽しい」。

(8) 現在、英語で音楽を学んでいるわけだが、将来的に海外で外国の方々アンサンブルをしたりすることは考えているか

谷河：現時点では考えていないが、自分自身はこれからも音楽をやめることはないので、英語で学んだ音楽の要素は、自分の財産となっていると思う。

鈴木：現在就職のことを考えている時期にあり、子供に音楽を教えるスクールや、海外演奏家を招聘するプロダクションの仕事などに興味を持っている。

(9) すでに「楽しい」というこの授業だが、さらにこうなればもっと「楽しい」という点があれば

谷河：現在先生は、英語が苦手な者も含め、学生の英語のレベルに合わせて対応してくださっていて、今の自分にとって「楽しい」が、今後履修者の多くが英語を得意としている場合などには、英語でのやり取りがより活発になり、その学生たちにとってより楽しくなるかもしれない。

(10) 授業での工夫について何うと、大変な準備をなさっているのではないかと推察されるが、日本語による授業の準備にかかる時間よりも英語による授業の準備の方が、はるかに時間がかかっているの

ではないか

立神：時間はかかっていると思う。机に向かって、というよりも、いつもこの授業のことを考えている感じ。

(11)授業が「大変」から「楽しい」にかわるきっかけ

谷河：一番のきっかけは環境であると思う。間違ったらだめだ、恥ずかしい、という環境がこの授業にはない。たとえ間違えても、それはこういう場面で使う表現、他にもっと良い表現がある、など、というレスポンスをもらうことができる。間違えても発言して大丈夫かもしれないと感じられる雰囲気があったこと。

(12)この授業を履修して、英語への学習意欲が湧くことはあったか

谷河：この授業を通して英語への学習意欲が湧いたというよりも、苦手なものでも、好きなことと一緒に取り組めば「楽しい」に変わるのだということを知ることができたことが良かったと思っている。

鈴木：英語の音楽用語を知ることがこれまでなかったので、今後もそうした知識を自分のうちに取り入れて、将来の仕事や留学などにつなげていきたい。

(13)日本語で学んでいた時には分からなかったが、英語で学んで始めて分かったことなどはあるか

谷河：表現の幅が広がった感じがしている。英語では、自分の感情をストレートに伝えることができると感じている。英語の語彙があまり多くないことが、端的な表現、身振り手振りを活かした表現につながった。

鈴木：声楽を学ぶ上で、同じ曲でも、日本語で歌うとき、英語で歌う場合で音符に対する言葉の乗せ方が違うため、音楽的な学びが深まった。

アンケートより

(1) ワークショップに参加して得た参考になる情報や気づいた点について

- ・ 実践的な話が多く、今後の役に立った。学生の生の声が今後の授業マネージメントの参考になった
- ・ 立神先生のまさにフェリスらしい授業に心が温まりました。個々の学生に対しての心配りや将来性も考えて、きめ細かな教授に学生も応えて成果があるのだと思います。For Others と言える授業だと感じました。学生対応にも活かしていこうと思います。
- ・ 事前準備や様々な配慮が必要とされる授業スタイルですが、実りのある授業と存じます。学生にとっても新鮮でぼんやりしている暇は（当然ながら）なさそうです。立神先生の話し方がたいへんわかりやすいと思いました。
- ・ 「大事な」ことを「わかりやすく」説明するという基本的な作業を、忍耐強く、工夫を重ねて行うことが大切なのだを再認識できた。英語による授業ということで、授業をする方も、受ける方も、その覚悟（心構え）が同じようにあるということがミソだと思った。このことは、日本語で授業する際にも（受ける際にも）意識すべきだと思う。
- ・ 英語によるコーチングの効果についてあらためて、大きなものがあることを知りました。好きなこと（音楽）プラス英語の強みが活かされていると思いました。立神先生も学生さんも新しいチャレンジをしていらっしゃる姿が、本当に素敵でした！
- ・ 難しい授業目的も方法を工夫することにより可能と知り、効果を上げることもできることを学びました。
- ・ 教授方法が、とても学生目線で行われていると知り、とても良い、面白い授業だと思いました。やはり、学生の生の声が聞けるのは、質問もしやすいし、理解が深まるものであった。
- ・ よい授業を作りあげていくためには、様々な工夫が必要であることがあらためて認識できた。
- ・ 授業が生きものであること、準備の大変さ、大切さがよく理解できました。専門科目を英語で教授することの本学ならではの意義があることも新たな発見でした
- ・ 学生の反応を見ながら教える内容のレベルを変えていく。立神先生が学生の表情や様子をよく見て、どの程度理解しているかをキャッチしていかれる。学生自身が授業を楽しんでいると思って参加している

事がすばらしい事ですし、充実した時間を授業で過ごしているのを感じます。

- ・ 先生方が気になさる観点を知れました。また自分自身が考えさせられるポイントもありました。
- ・ 立神先生が共演芸術の授業に向けて私達生徒のためにご尽力くださっているのだな、ということが分かりました。
- ・ 「英語による音楽授業」もしくは「英語による実践教育」という、英語を使って専門性を学ぶ意義に重きを置いて説明されていたが、逆に専門科目を英語で学ぶことで、英語力が大きく伸びていることが興味深かった。

(2) 次回以降の希望開催テーマ

- ・ 英語によるワークショップ
- ・ 語学の新カリキュラムに関わる講演 or 実例 or ワークショップ
- ・ ラーニングコモンズに関わる講演会
- ・ 同様のテーマが引き続きあるとうれしいです。

ワークショップの様様



<立神教授による事例報告>



<会場の様子>



<トークセッションの様子1>



<トークセッションの様子2>

第1回FD講演会

「産業界のニーズ」を踏まえた本学の今後の教育の在り方を考える
～フェリスの強みや特色をどのように活かすか～

日時：2019年9月17日（火） 16：30～18：30
会場：緑園キャンパス CLA棟 4階 2405教室
（意見交換会：CLA棟3階 2305教室）

題目：
「産業界のニーズ」を踏まえた本学の今後の教育の在り方を考える
～フェリスの強みや特色をどのように活かすか～

プログラム

16：30～17：35 講演会・質疑応答
17：35～18：00 ラウンドテーブル・講評等
18：00～18：30 意見交換会（茶話会）

挨拶：秋岡 陽 学長（大学FD委員会委員長）
司会：竹内 正彦 教務部長（文学部日本語日本文学教授）
講師：人材開発コンサルタント 高嶋 成豪 先生
（「キャリア実習」科目担当・本学非常勤講師）

対象者：専任・嘱託教職員

出席者：学長
教員 14名（英文0、日文3、コミュ0、国際5、音芸6）
職員 24名

ビデオ閲覧：教員2名（国際1、センター1）

講演会チラシ

「産業界のニーズ」を踏まえた
本学の今後の教育の在り方を考える
～フェリスの強みや特色をどのように活かすか～

◆プログラム
日程 2019年9月17日（火）（対象者 本学専任教職員）
【第1部】会場：CLA棟2405教室
16:30～17:35 講演会・質疑応答
17:35～18:00 ラウンドテーブル・講評等
【第2部】会場：CLA棟2305教室
18:00～18:30 意見交換会（茶話会）

◆講師
高嶋 成豪（たかしま なるひで）先生
人材開発コンサルタント
「キャリア実習（高橋・地産インターンシップ）」科目担当・本学非常勤講師


＜内容＞
学生が「何を学び、身につけることができるのか」が不明になっていく。そして、学生が「成長しているのか」「学修の成果がでているのか」を明らかにする必要がある。卒業後、就職活動で求められるスキルや能力を、学生自身が「何を学ぶべきか」として、学生が大学卒業後に進んだ産業界にある。果たして、「成長」「学修の成果」ということはどのように認められるのか。

本学のインターンシッププログラムとして、学生の専修、自修を促進し、定着した基礎知識を生徒を講師に迎え、次のようなテーマを中心に講演をいただきます。

1.フェリス生の学びは社会の現場でどのような成果を上げているのか。あるいは、組織にどう活かせるのか。
2.本学におけるキャリア教育の意義
3.本学における強みや特色はどのように活かせる可能性があるのか。

また、講演会の内容を基に、本学の強みや特色を踏まえて、どのように「何を学ぶべきか」を明確にするための実践的な議論を行います。ご参加ください。ご質問は、お申し込みの際にお知らせください。

＜講師紹介＞ 高嶋 成豪 先生
人材開発コンサルタント、インフォコム・テクノロジーズに在籍。現在は、企業に在籍する人材開発のリーダーシップを、総務部長としておこなっている。GMJ Japan、Johnson & Johnson など、人材開発に特化した企業での講演活動。また、講演活動を通じて「キャリア実習（高橋・地産インターンシップ）」の意義を、書籍に『みるみるわかる たった1つの原則（高橋・地産）』を刊行。書籍に『みるみるわかる たった1つの原則（高橋・地産）』などがある。
本学の専任教職員、専任・嘱託教職員、京都大学経済大学経済学助教授、フェリス女子学院大学非常勤講師、筑波大学大学院 総合文化科学研究科 専攻主任。



講演の概要

1. 「産業界のニーズ」について

1-1. 経済界の声（その1）：経済界が求めるコミュニケーション能力とは？

経団連の2018年度新卒採用に関するアンケート調査によると企業が採用選考にあたって特に重視した点で最も多かった回答は「コミュニケーション能力」である。しかしながら、この回答が選ばれた理由はその言葉の一般的な定義であるところの意思疎通の能力、異文化を理解する能力という意味だけではなく、組織の上の立場のものに対して「付度」する能力を指している可能性がある。

1-2. 経済界の声（その2）：社会人基礎力

経済界からは様々なメッセージが発信されているが、そのひとつに2006年に経済産業省から提唱された社会人基礎力というものがある。これは次のような力である。

- ・考え抜く力（シンキング）
- ・チームで働く力（チームワーク）
- ・前に踏み出す力（アクション）

このように提唱された社会人基礎力ではあるが、実際にはほとんど使われてこなかった。しかしながら2018年に次のとおり新たな3つの視点が加えられ再度提唱されている（経済産業省産業人材政策室「人生100年時代の社会人基礎力について」2018）。

- ・何を学ぶか
- ・どのように学ぶか
- ・どう活躍するか

このように再度提唱するというこだわりの中に、「産業界のニーズ」のヒントがあると考えられる。

1-3. 2040年の社会変化の方向～社会人基礎力と中教審答申が共有する背景

このように社会人基礎力がアップデートされた背景は中教審でも共有されている。具体的には中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」に見ることができる。それはこの先20年の変化、目指すべき方向性を次のようにとらえたものである。

- ・SDGsが目指す社会
- ・Society5.0、第4次産業革命が目指す社会
- ・人生100年時代を迎える社会
- ・グローバル化が進んだ社会
- ・地方創生が目指す社会

実はこの内容のうち約半分は経団連の様々な提言と重複する。このエッセンスを汲み取りながら「産業界のニーズ」に大学としてどのような対応ができるのか検討する材料となる。

私が担当する授業でも、この先70年という前提で人生を考えること（人生100年時代）、横のネットワークの重要性（Society5.0）の重要性は伝えている。

1-4. 経済界の声（その3）～中教審答申への応答（経済同友会の場合）

半ば経団連と歩調を合わせたような答申に対して、経団連とは性格を異にする経済団体である経済同友会は答申にほぼ同意しながら次のような注文を付けている。

- ・（高等教育を終えるまでに、）物事の本質を見極める意識をもって行動し、変化に対応する柔軟性を身に付けることを期待する。
- ・（高等教育機関は、）多様な価値観を受け止め、決断する覚悟をもってグローバルにリーダーシップを発揮できる競争力ある人材の育成も強化すべき

（経済同友会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」（案）に関する意見（2019））

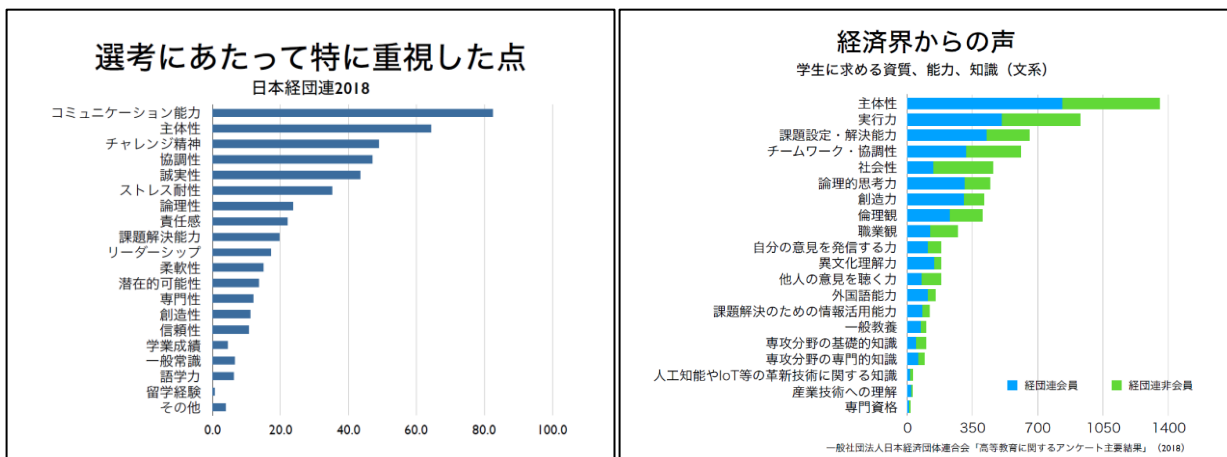
1 点目は経営者の本音であり非常に重視していると考えられる。つまり経営者は部下に本当の問題に取り組むこと、本当の問題を明らかにすることを求めているにもかかわらず、多くの中間管理職は経営者の意に反してYESマンになってしまっているという危機感がある。

これはビジネス界の中で身に着けるスキルでは応えられない世界観、人間観を高等教育で身に付けてほしいという、まさに大学リベラルアーツ教育が対応できる領域ではないか。

これと同様のことは経団連会長の中西宏明も述べている。その著作「社長の条件」において大学教育に求めるものの一つとして主に統計という意味での数学が挙げられている。俗に「数字が分かる」というような言い方をされるが、この点は私も重要だと考えている。「人の言ったことを右から左に伝えるだけ」と指摘されるビジネスの現場における問題点は、まさにこの点が訓練されていないが故である。自分の持っている前提、フィルターというものを通さずに、事実そのものを知覚し、他者に説明できることばに変換できる能力という意味での「数字が分かる」ことが求められている。ここにもこれからの大学教育に期待されるもののヒントがあるのではないか。

1-5. 経済界の声（その4）～消えるコミュニケーション能力、立ち現れる倫理観、労働観

また、学生に求める資質、能力、知識（文系）（一般社団法人日本経済団体連合会「高等教育に関するアンケート主要結果」（2018））を見ると、1-1.で見た「コミュニケーション能力」が消えており、主体性、実行力、課題設定・解決能力が上位にきている。この表から、産業界からの本当のニーズを探ることができるのではないか。



私に関わる能力開発の現場（いわゆる研修）では「現場のリーダーの主体性を高めてほしい」「主体的に仕事をできるようにして欲しい」というニーズが非常に高い。ここで経営者が求める主体的、主体性を翻訳すると、経営者が理解できる範囲内で、指示がなくても各自が判断し思うように仕事をして欲しいという期待である。都合のよい要求であるが、混沌とする世の中で経営者も将来がわからないという本音の現れでもある。

主体的に実行するには「課題設定」の基準が必要であるが、その基準には、「専門知識」「論理的思考力」とならず、「倫理観」「労働観」が問われる。経営者はその重要性を理解しており、専門能力以上に「倫理観」「労働観」に従業員に求めている。

2. フェリスの強みや特色をどのように活かすか

2-1. 「キャリア実習」科目で教えていること

倫理観、労働観こそが重要という認識のもとに、

「For Others の精神でできる仕事を見つけなさい。でも、そんな仕事が最初からあるわけではない。あるとき、ふと今の仕事すべて賭けられる仕事だと気づくんです。」

「毎日、毎週、計画し、実行、振り返りを繰り返しましょう。自分で計画しないと、他人が押しつけてきます。この習慣を身につければ、会社と男の言いなりにならずすみませう。」

ということを学生に伝えている。

2-2. 強みを活かす（その1）～学生のモデルとなる教員

フェリス女学院においてはキリスト教精神に尽きる。信じるものがあるから、自分を投げ出して他者のために生きられる。経営者が従業員に求めるのは、自分より顧客を優先すること。しかしながら、従業員の多くは自分優先である。それは失うのが怖いからである。恐れを乗り越えるには信仰が必要である。

ただ、学生に信仰を押しつけることはできない。そこで、教員がその姿を体現すること。すなわち、学問に生きる姿を見せて、逃げない。課題に立ち向かい、自らを信じ、チャレンジする。モデルとなる必要がある。

2-3. 強みを活かす（その2）～フェリスのカリキュラム

産業界は変化に対して主体的に取り組める能力を求めている。それは基本的にスピードである。そのためには判断基準となる労働倫理＝責任感、感覚を養い、持つことが求められる。リベラルアーツは、本来何かの役に立つためにあるわけではないが、世界観、人間観とならず、労働倫理を養うのにも役立つ。文学、哲学、歴史でも、さまざまな事例の中で、学生が当事者だったらどう判断するかを問うなど、討議型の授業を取り入れるのは好例だと考えられる。ケースディスカッションやディベートを通して、どっちが正しいと割り切れない問題に対して、どのように判断するかを学ぶことができる文学、音楽など素晴らしい題材である。

今あるものから新しいコンテンツを付け加える必要があるかもしれないが、今あるものをどのように見せていくかということがより一層問われている。

ラウンドテーブル

講演を受けて、主に次の2点についてグループごとにディスカッションを実施した。

①本学における学びの強みや特色を産業界でどのように活かせる可能性があるか

②現行のカリキュラム体系や科目の内容を工夫する余地はないか

各グループからの発表の要旨は次のとおり。

- ・社会に対して「For Others」を打ち出せることはメリットである。
- ・特に文学部及び国際交流学部においては、学生に主体性や実行力をつけさせるために、カリキュラムが今後ますます重要になってくる。
- ・音楽学部は主体性や計画性が身につけられるようなカリキュラム体系をとっており、教員と学生との距離が近いことから、教員の学問に対する姿勢を見せていける。それを社会で活かしていければよい。

- ・過去は、倫理学や哲学等を学んでも収入に直結しないことから敬遠する向きがあったが、産業界がそれを求めるようになってきている点において時代は変わったと感じる。
- ・産業界のニーズとは時代に沿って変わるものであるため、本学での学びをそのニーズに合わせる必要があるのか疑問である。
- ・文学も先端的な領域も、データを分析して論理的に結論に導くという意味では同じである。その点を自覚し、うまく社会にPRできればよい。
- ・カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーが学生に十分に伝わっていないと感じることがあり、学生に浸透させる施策が必要である。
- ・リベラルアーツとは人類の叡智である。今すぐに必要なものではないが、仕事に限らず、子育てなどいついかなる時にも活用できる。実学は、すぐに役立つが、すぐに使えなくなる可能性も考えられる。
- ・「For Others」の精神をもつことが、社会で頼られる存在になりうる。
- ・本学が小規模大学という特徴を活かし、さらに主体的に学べるように今まで以上に学生が自由に発言できる機会を増やせるようなカリキュラムにするとよいのではないか。
- ・多様な学びや柔軟性など、フェリスの強みは共有できているか。また、学修行動調査などから、リーダーシップに対する自己評価の低さやPBL科目の履修を敬遠する学生が一定数存在することがわかっている。在学生への広報や情報発信が必要である。

講評

ラウンドテーブルの内容を受けて、高嶋講師から次のとおり講評があった。

- ・音楽学部演奏学科には主体的に動ける学生が多い。音楽の道でも産業界でも活かせる力である。
- ・産業界のニーズにあわせて動くことはおすすめでできない。対応が遅れることになり、他大学との熾烈な競争環境に身を置くことになるからである。むしろ他大学ではできない、産業界が驚くような学生を創出することを念頭に置いてはどうか。
- ・学生が専攻する研究をしっかりとやること。それが、プロセス（PDCA）を身に付けるトレーニングにつながる。産業界においても、求められるものは同様である。
- ・インストラクショナルデザイナーを置いてプログラム作りに取り組んでいくという方法もある。
- ・労働倫理を学ばせる大学はあまりない。働くことを学ばせるようなカリキュラムを検討することも一つの手段である。

アンケートから

- ・本音、本質という切り口で分析して頂いて参考になった。
 - ・今後の指針が参考になった。
 - ・いわゆる「財界」の考え方に対して、どのように接するのかについてよい視点をいただき、今後大学が成し得ることの重要性を意識することができた。
 - ・カリキュラムに自信が持てた。後は自分がその中でどれだけ学生に真剣に向き合い研究することを学んでもらえるかが大切だと思った。
 - ・「産業界のニーズ」と教育との関係について深く考えるよいきっかけになりました。
 - ・産業界の本音のようなものを伺うよい機会となりました。労働倫理については強い関心をもっています。社会貢献・正直ということもフェリスも忘れてはならないと思います。
 - ・講演およびグループワークを通じ、フェリスの現行のカリキュラムの中でできることが見えてきた感がある。
 - ・産業界の情報や大学の取り組みなどが参考になった。
 - ・フェリスの“For Others”が初めて産業界のニーズにリアルに結びついた体験ができました。とても新鮮でした。
 - ・社会（産業界）が求める“力”“ニーズ”を具体的に考えることができました。フェリスの強みを改めて考える機会となり良かった。
- “For Others”というモットーはわかりやすく良い。倫理観とすぐ結びつけられる。

大学としてはカリキュラムが非常に重要。学びの形を方向づけられる。
フェリス独自の強みを発揮する必要がある。

- ・ 産業界・社会で求められる力から、本学ではどういった教育をしていくか考えることができた。
- ・ 産業界のニーズにカリキュラムを合わせるといのは他大学もやっていることだと思うので、私見では、フェリスはそうせずフェリスならではの教育をし、個性のある人材に育てることがいいのではないかと思っていたので、高嶋先生のお話を伺って、自信が持てました。学生は自己の専攻をしっかりやることで、産業界でも役立つ「プロセス」を学習するのだというお話がとても良かったです。

講演会の様子 講演会



ラウンドテーブル



2019年度は昨年度から参加しているALCS学修行動比較調査を実施しました。他大学と共同で行う調査であるため、本学の強み、弱みを浮き彫りにし、今後取り組むべき課題を明らかにすることを狙いとされています。

【Ferris 学修行動調査】

目的	(1) 学生の学修状況（学修時間の実態や学修行動）の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 2 年次生・4 年次生
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能・Google フォーム機能利用
実施期間	2019 年 9 月 25 日（水） 2020 年 3 月 18 日（水）～4 月 13 日（月）
回答率	第 7 回：17.8%（2020 年 3 月 18 日付在籍者数：1,317 名、回答者数：235 名）※2019 年度 9 月卒対象者含む（22 名） 参考：前年度同時期 20.6%（2019 年 2 月 22 日付在籍者数：1,250 名、回答者数：257 名）
設問の概要	(1) 時間の使い方 (2) 授業での経験 (3) 学修への取り組み (4) 授業に対する意識 (5) 入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (6) 本学の教育への満足度 (7) その他

【ALCS 学修行動比較調査】

目的	(1) 学生の学修状況（学修時間の実態や学修行動）の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証 (3) 他大学間との比較分析による現状把握
対象者	学部学生 1 年次生・3 年次生
実施方法	専用 Web サイト
実施期間	2019 年 9 月 23 日（月）～10 月 20 日（日） 2019 年 12 月 9 日（月）～12 月 20 日（金） 2020 年 1 月 16 日（木）～1 月 27 日（月）
回答率	51.9%（9 月 3 日付在籍者数：1,197 名、回答者数：621 名）
設問の概要	(1) 経験（学修に関する経験） (2) 時間（時間外の活動量） (3) 成長（学修による変容の自覚） (4) 満足（学修関連の満足度） (5) 希望（学修に関連して望んでいること）

4-1

授業アンケートと授業改善計画

2019年度も授業アンケート及び授業改善計画を実施しました。授業改善計画は、授業アンケート回答に対する担当教員からの応答により、学生が自身の今後の授業への取り組み方や学修活動の振り返りにヒントを得ることを目的としたものです。授業改善の参考資料として引き続き活用いたします。

【授業アンケート】

対象	全科目	
実施方法	FerrisPassport の授業アンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート（通常科目）：7月9日（火）～7月29日（月） 授業アンケート（集中講義）：第1ターム 8月3日（土）～8月7日（水） 第2ターム 8月27日（火）～9月6日（金）
	後期	授業アンケート（通常科目）：1月6日（月）～1月27日（月） 授業アンケート（集中講義）：第1ターム 2月6日（木）～2月12日（水） 第2ターム 3月3日（火）～3月12日（木）
回答率	（前期）27.1% （後期）19.9%	

【授業改善計画】

対象者	全教員
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用
実施期間	（前期）7月31日（水）～9月13日（金）
	（後期）1月29日（水）～3月27日（金）
提出率	（前期）62.9% （後期）71.3%

4-2

ルーブリックの活用

中期計画 17-20 PLAN のひとつである「教学マネジメントに基づく教育支援」の「学修成果の把握」への取り組みとして、2018年度にルーブリックの作成に着手し、2019年度より順次活用を開始いたしました。

具体的には、文学部日本語日本文学科における卒業論文の審査にルーブリックを導入し、複数教員審査における採点基準の明確化、客観性の確保などの有用性を確認しました。また、国際交流学部国際交流学科の1年次生を対象として複数クラスを展開する必修科目「導入演習」においてもルーブリックを作成し、これを学部 web サイトで学生向けに公開しました。学生はこのルーブリックを確認することによって、どのクラスであっても同じ評価基準であることを理解し、また大学における学びに求められる成果というものを具体的に知ることができるようになりました。

4-3

卒業生調査

卒業生という外部の視点からも本学の教育の成果・効果を明らかにし、本学に対する期待、要望を把握することを目的として卒業生調査を実施しています。

アンケートの結果からは、学生時代に熱心に取り組んだもの、現在の仕事に役立っているものとして、共通科目を挙げた学生が多いこと。また、大学時代にもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業として、語学科目を挙げた学生が多いことがわかりました。

今後、本アンケートを継続して、カリキュラムの一層の充実を目指します。

【調査及び結果概要】

実施期間：2019年9月1日～30日

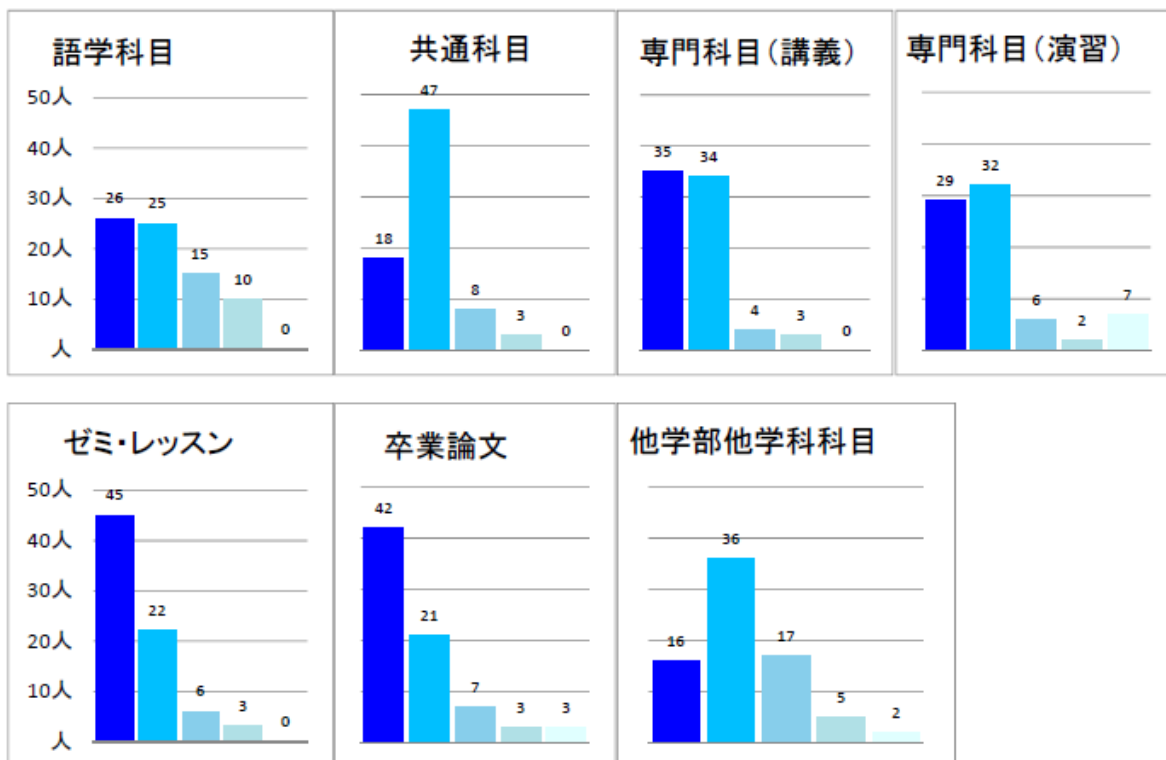
実施方法：葉書で依頼し、webにて回答

対象人数：529名（2014年3月出学者）

有効回答：76名（回答率14.4%）

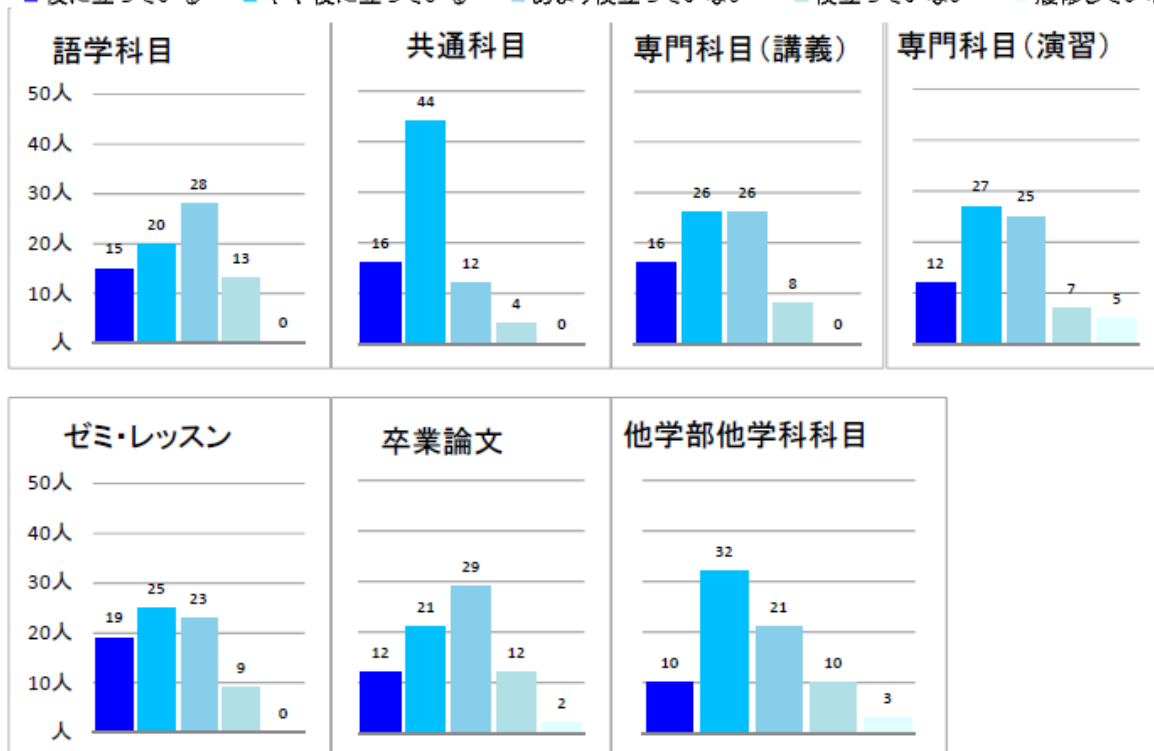
学生時代どの程度熱心に学んだかご回答ください。

■ 熱心 ■ やや熱心 ■ やや不熱心 ■ 不熱心 ■ 履修していない

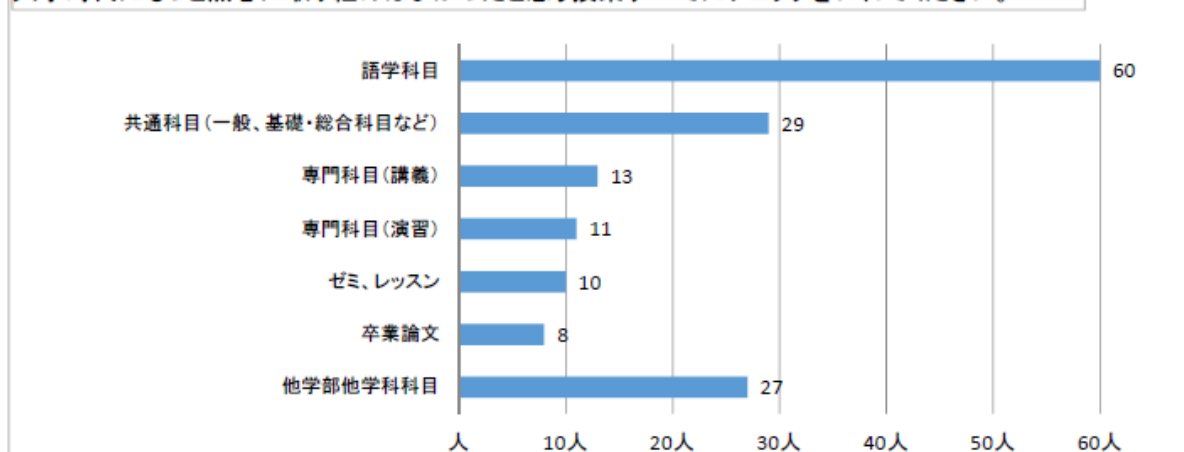


現在の仕事(あるいはこれまでの仕事)に役立っていますか。

■役に立っている ■やや役に立っている ■あまり役立っていない ■役立っていない ■履修していない



大学時代にもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業すべてにチェックをいれてください。



4-4

PBL 科目の推進

中期計画 17-20 PLAN のひとつである「PBL 科目の推進」として、PBL 科目における学生の活動経費(交通費等)の補助が挙げられます。

2019 年度は、支援対象科目 3 科目(履修者数 45 名)のうち、申請のあった 15 名に 31,974 円(対前年増減率 183.5%)の支援を実施しました。

4-5

大学院のFD活動

2019年度は大学院生に研究倫理教育を実施しました。文部科学省は、大学等の研究機関に対して①研究活動における不正行為の事前防止の取組を実施すること、②研究活動における特定不正行為への対応について徹底することを求めています。これを受け、本学ではすでに研究に関わる教員をはじめ、研究に関わる事務職員についても、研究倫理教育の一環として、日本学術振興会 eラーニング[eL CoRE]のプログラムの受講を義務付けていましたが、学生も例外ではなく、特に研究に深く関わる大学院生には必ず受講させるようにしました（受講期間：2019年6月～8月末日まで）。

また、修士課程および博士課程においてコースワークとリサーチワークを明確にしているのは人文科学研究科のみであったため、音楽研究科においてもコースワークとリサーチワークの明記したマップを作成しました。

5

2019年度活動内容

期間	テーマ、トピック	主催
4月2日(火) 4月5日(金)	FDオリエンテーション	英語教育運営委員会
6月10日(月)～6月28日(金) 7月23日(火)～7月29日(月)	専任教員による授業参観 (対象：専任教員担当科目)	大学FD委員会
6月3日(月)～7月15日(月)	前期授業アンケート実施(授業への要望)	大学FD委員会
7月9日(火)～7月29日(月) 8月3日(土)～8月7日(水) 8月27日(火)～9月6日(金)	前期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学FD委員会
7月10日(水)	外国語による教授法FDプロジェクト⑤	大学FD委員会
7月31日(火)～9月13日(金)	授業改善計画	大学FD委員会
9月11日(水)	第1回国際交流学部FD勉強会	国際交流学部・国際交流研究科FD委員会
	第1回音楽学部FD勉強会	音楽学部・音楽研究科FD委員会
9月17日(火)	第1回FD講演会	大学FD委員会
9月20日(金)	Ferris English Teachers' FD Workshop	英語教育運営委員会
9月23日(月)～10月20日(日) 12月9日(月)～12月20日(金) 1月16日(木)～1月27日(月)	ALCS学修行動比較調査 (対象：1・3年次生)	大学FD委員会
11月6日(水)	FD活動：言語センター改修に関する懇談会①	言語センター運営委員会

期間	テーマ、トピック	主催
11月18日(月)～1月9日(木)	後期授業アンケート実施(授業への要望)	大学FD委員会
1月6日(月)～1月27日(月) 2月6日(木)～2月12日(水) 3月3日(火)～3月12日(木)	後期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学FD委員会
1月29日(水)～3月27日(金)	授業改善計画	大学FD委員会
2月10日(月)	第2回音楽学部FD勉強会	音楽学部・音楽研究科FD委員会
2月21日(金)	第3回音楽学部FD勉強会	音楽学部・音楽研究科FD委員会
3月10日(火)	FD活動:言語センター改修に関する懇談会②	言語センター運営委員会
3月18日(水)～4月13日(月)	Ferris 学習行動調査 (対象:2・4年次生)	大学FD委員会
4月～2月	教育の質向上に向けた取り組みーPBL科目の推進	大学FD委員会
4月～3月	教育の質向上に向けた取り組みールーブリック活用	大学FD委員会
6月～3月	教育の質向上に向けた取り組みー大学院のFD活動	大学FD委員会
9月	教育の質向上に向けた取り組みー卒業生調査	大学FD委員会
12月～3月	教育の質向上に向けた取り組みーシラバスの改善	大学FD委員会

以上